Osaka University Knowledge Archive

Title	まぶしく光り輝いて : 師についての回想と教説
Author(s)	本間, 直樹
Citation	メタフュシカ. 2011, 42, p. 23-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23306
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

まぶしく光り輝いて
──師についての回想と教説──

本間直樹

こういうもの書く必要があると思われた理由は以下の通りである。今日、師に関する教説は、どうしようもなく孤立させられている。師について語られる機会はいくらでもある一方で、師に関する教説を真面目に主張し弁護する者はほとんどいない。そうした教説は、それをとりまく種々の言論から完全に見捨てられている。遠ざけられ、軽んじられ、嘲笑され、さらには科学、哲学、芸術などの権力機構からも切り離されてしまっている。ある教説が、それがもともともっている力のせいで時代遅れのものになり、漂流しはじめ、あらゆる群れをなすものの外へと運びだされるとき、どれほど小さかろうと、それ自身がひとつの公言の場となることしか残されていない。[1]

愛憎──*どうしてこれほどまでに憎らしく*

愛憎は師弟のあいだに通い合う血液である。愛は送り出され、憎しみは送り返される。この循環こそが両者の関係をなしている。愛は巡る。吐き出された憎悪は、そこいらに付着し漂い、やがては取り込まれる。愛は憎しみに先行し、憎しみは愛を仕上げる。この循環から抜け出そうとするのではなく、そこに正しく入り込まなければならない。

師弟のあいだで交わされる愛憎は、いわば、器官をもたない身体の愛の徴である。それは何も産み出さない性の、最も創造的な営みであり、その他諸々の創造活動の源でもある。

依存──*私は何一つできていない*

「もうたくさんだ。私は一人でやっていける。」

---

[1] 以上はある著作の冒頭を、敬意をこめて、全面的にもじったものである。cf. Roland Barthes, *Fragments d'un discours amoureux*, Édition du Seuil, 1977.

「あの人の代わりはどこにもいない。私に必要なのはあの人だ。」
「あいつの言うことは我慢ならない。」
「あの人は何もしてくれない。」
弟子は甘えから逃れることができない。ところが弟子は、師に直に甘えることができずにいる。甘えることによっては自分の望むものが決して手に入らないことを、弟子ならばよく弁えているからである。あるとき弟子は、自分が師に甘えていた、何一つ自分でできていない、と気づく。弟子の師に対する甘えは、現在における行為とは決してなり得ず、辛うじて師の認識となり得るにすぎない。それが師の承認となるとき、はじめて弟子は師を恩師と呼ぶことができるだろう。

歌声——*いつもあの歌を*

師とは一篇の歌である。そして弟子は師を歌う声である。
歌は歌う——身体の響き、精神の唸り、情念の轟き、言葉の息吹として、意味の震え、生命の律動、霊魂の躍動、存在の浄化として。

汚名——*後ろ指をさされながら*

師は汚名を恐れない。なぜなら師とは単独者であり、師のなすことは他の何ものとも比較され得ないから。師の不名誉を恐れる者は見せかけの弟子である。ときに師は弟子を不名誉のなかに送り出すが、それは師から弟子への最大限の信頼ゆえにである。また、師は批判を弟子やその他の者に委ね、耳を傾けるが、耳を貸そうとはしない。師は創り出す者であり、批判は創らぬものの営みである。

歓待——*何度も訪ね、扉を叩いた*

あれこれと師を煩わすのが弟子の役割である。
弟子は時と場合を選ばず、しばしば師のもとを訪れ、扉を叩く。師は、ときに快く、ときに苛立ちを隠すことなく、弟子を迎え入れる。ことによって師は扉を固く閉ざすこともあるが、それは扉の外で弟子を迎えるためか、もしくは、誤った扉を叩いているのを知らせるためだろう。歓待とは、師が唯一、拒絶できないものであるとともに、弟子が知らぬうちに師から享受しているものである。

近傍——*少し離れた席に座り、書を開いて待っていると*

弟子は、師に対してその傍にいることを請い、師は弟子にそのことを許す。これが師の弟子に与える関係のすべてである。
師の近傍は時空間に限定されない。弟子はいつも師の傍にいて、師はいつも弟子の傍にいる。

弟子はわからないと言い、応えて師もわからない、と言う。弟子は師の、わからない、にしばしば驚き、そのわからないのもとに佇み続ける。師の傍らにいることはできるが、それは近さとまったく異なる関係である。師とは近傍である。

苦痛——*誰もわかってくれない*

師は弟子の苦しみに苦しんでいたのだ。それを知ることができるのはひとつの僥倖であり、出来事であろう。しかし、弟子の苦しみに苦しむ師を知ることは、弟子にはできない。あるいはそれを知り得たときには師はすでに去って、目の前にいない。苦しみをともにすることはできない。共苦には不在と時間のずれが埋め込まれているのだ。

権威——*してはならない、許されない、誤ってはならない*

誰の口から発せられようと、服従を強いるものは権威である。すべての権威は幻が見せるものであり、幻を追いかける者の前にしか存在しない。権威を求める者は互いに競い合い、対立する。また、権威に脅え、反発し、それを批判する者も、実は権威の力を密輸入し密かにそれを愛撫している。権威、つまり無謬を愛する者は誤りを許せない。権威と取り違えられること、それが師の不幸である。師とはむしろ、誤り、踏み外すことも辞さぬ者である。

光明——*まぶしく光り輝いて*

師は弟子にとって光となる。師は光を放つことよって、それ以外のものを照明する。あるときは師自身が光源となり、あるときは別の光源から光を受けて輝く。
光を眼差すことはできない。光源に目を遣れば目が眩み、離せばすべてと一体になる。
光の強弱は光景を変化させる。太陽のような強烈な光は、より多くの影と闇をつくりだし、黄昏は、光と闇のあいだにすべての輪郭を融解させ、月の光の仄かな明るさは、なだらかなつながりを浮かび上がらせる。
師の光は闇と対立しない。むしろ光は光自身を区別し、見えるものとなるために闇を必要とする。

哄笑——*どうしてもそれを抑えることができない*

笑いは自ら抑えることのできぬものの解放、コントロール不能の踊りである。
師は弟子を笑い、弟子は師を笑う。笑うことだけが両者に対称性を授ける。真の笑いは、せせら笑いや偽の笑いを笑い飛ばす認識あるいは命法である。師弟のあいだの笑い、とりわけ爆笑は恥、権力、権威を粉々に吹き飛ばす。逆に言えば、笑いを恐れ、それに脅える者は、力、権威、外面の囚人である。師弟のあいだで交わされる笑いは、より高次の学びをもたらすだろう。

散種——*すべてのこどもを愛した*

「彼はどのような状況になろうとも、こどもたちに触れる機会を失わなかった。こどもを愛した。自分の子、他人の子、関係なくすべてのこどもを。」
師弟の関係は、血縁、家族、系統とは決定的に異なるゆえに、父子、母娘、兄弟、姉妹、類似、変異のいずれの関係にも置き換えることができない。弟子はすべて師のこどもであるが、いずれも身元不明の非嫡出子である。師の教えは伝承されない。それは伝統となることで破壊されるだろう。それは書き物あるいは弟子の身体に刻まれ、別のとき、別の仕方で、何ものかに対して表現され、そこではじめて意味を着生させる。

嫉妬——*愛の裏側*

弟子は、師の他の弟子に対する振舞いに嫉妬の炎をもやす。弟子たちは嫉妬に悶え、師は弟子たちの嫉妬に悩まされる。嫉妬は師からの愛を逆流させ、愛によって師も他の弟子も手中に収めようとする反逆の心であり、師すらもその炎から身を守るのは容易でない。つまり嫉妬は試練である。試練は避けられないがゆえに、この試練を遠ざけようとするいかなる組織的な努力も無駄に終わるだろう。

脆弱——*何度も何度も結びなおして*

師と弟子の結び目は脆弱であり、容易に解けるか、もしくは他の関係に変質してしまう。しばしばその脆弱さから目を逸らすべく、家、学校、講座などといった諸制度が組織され、そこから管理への依存が結果する。管理は最も脆い部分を補強するどころか、そこに余計な重圧をかけてしまう。むしろ、この脆さ、不安定さ、変質しやすさこそが、比類のない仕方で師弟を結びつけている。師への脆い結びつきを弟子に知らせるのは師の不在や退去である。

選択——*その前で試されるのは*

師は弟子を選ばない。師は弟子に選ばれるのだ。師と弟子のこの非対称性こそが、師弟という関係をかたちづくるだろう。弟子は師を選ぶことによって、自ら師の弟子として選ばれるのである。それは他の選択とは異なる、特異な、選ぶ主体に先んじる選択である。つまり、師をもつという選択を自ら引き受ける主体になることが、弟子になることである。

贈与——*名声と負債と感謝*

最初の弟子は、師の衣、装身具、場所を出来るだけ高値で売ろうとやっきになった。次の弟子は、師に代わって返済すべき多くの負債を発見し、師の負うものの大きさを知って途方に暮れた。最後の弟子は、師が自分に与えるのはただ師であることのみである、と気づき、贈

られたものへの感謝に打ち震えた。

対立——*諍いは諍いを*

師と弟子、あるいは、弟子と弟子は対立し得ない。いかなるものであれ対立は、第三のものが見させる錯覚である。あるときは師弟は、エディプス的な対立関係に堕してしまい、息子の求める父の権威と対象としての母を所有する愛のあいだで師が見失われる。あるときは不在の父をめぐって兄弟のあいだで、嫡出と庶出のあいだで、あるときは子をめぐって。エディプス的なもの、家族的なものこそが、師弟を欺く悪霊である。

畜生——*教えを乞わないものと、いつも*

師には常に畜生が伴っている。師は人と畜生を区別せず、畜生を愛する。畜生は師の言うことを解さず、師に教えを乞わない。師は畜生に語らない。命令しない。師は畜生とともに暮らし、畜生から与えられる。師は畜生と連帯し、行動を起こす。ときとして師は、畜生！と叫び、畜生になる。畜生は師の友である。

追随——*ついていけません*

後を追いかけることは、師が最も忌み嫌うものの一つである。追うことは、追従、追随、媚び諂いを結果する。追う者は、常にそれ以上のものを手にしたいと望む。師はむしろ身軽さ、素早さを好む。師は誰よりも逃げ足が速く、遁走が特技である。師は一処に長居せず、いつも知らないあいだに立ち去っている。また師は変装の名人であり、別人となりかわって易々と尾行をまいてしまう。

抵抗——*その抗う姿に胸を打たれ*

「その抗う姿に彼が胸を打たれたのは、ずっと後になってからだった。」
弟子は師に抵抗する。弟子の抵抗は師からの流れに逆らう力であり、反転せられた師の力である。ゆえに、弟子の抵抗は師そのもの、その表現である。抵抗こそが師弟の関係を最も創造的なものに移行させるだろう。そして、師は何に抵抗するのか。それはすべてに対する抵抗であり、そのなかでもっとも厳しいものは、師自身への抵抗である。

逗留——*身の寄せどころのない者に*

師は平地や岩肌にできたくぼみである。弟子は師のくぼみを発見し、雨風を防ぎ、身を休めるが、いつまでもそこに留まり続けることはできない。師のくぼみは場所を貸し与えるが、そこから去る者に、より多くを与える。

くぼみは何ものにも帰属せず、何ものも帰属させない。師は帰属、場所の外である。弟子は流れるか、淀むかのいずれかしかない。

名前——*その疎ましきもの*

「その名前はときに疎ましく感じられた。彼のなすことすべてにその名前が先回りしているように思えたからだ。」
それは何かを、何者かを識別するための名称ではない。それは与えられた名前ではなく、自ら与えた名なのだ。つまり、原因であると当時に結果であり、主体であると同時にその産物である。師の名はそれが過去・未来に与える影響すべてをそのもとに集約する。

反発——*私にはわからない*

反発と不安は理解を超えたものに対する弟子の症候、反動である。両者に共通するのはその受動性である。反発は、与えられたものに対する、不安は与えられないものに対する否定的感情である。
弟子にとって師とは常に理解を越えるものである。弟子の反発と不安を取り除くどころか、師は邪険にもますます弟子の反発を煽り、不安を掻き立てるだろう。

日陰——*陰を求めて*

「彼は陰を求めていた。太陽の光は眩しすぎて、その直下では生きていけない。光の追求から免れる所が必要だった。」
師はそこにじっと佇んでいた。彼はおずおずとそばに近づき、師が拵えた陰に自らを匿う。師がそれに気づいたかどうか定かではない。とにかく師は動かなかった。
師は陰を否認しない。むしろ自身のつくる陰と戯れ、その形を楽しむ。マイナス、マイナーであるもの、そうあることに師は臆することなく加担し、共謀する。

複数——*幾人もの師と*

「私には幾人もの師がいた。」
弟子にとって師は単数にして複数である。
弟子は複数の師につくときでも、常に単数の師に向かっている。
たった一人の師を前にするときも、弟子は師がその隣りや背後に多くの師を伴っていることを感じとるだろう。一人の師は、師であることによって、すでに第二、第三の師である。

忘却——*君は誰だったか*

忘却は師の特権である。師は弟子との約束を忘れる。師は、己の言葉を、過去を、名前を、弟子の顔を忘れる。弟子は過去と現在を照合し、どちらが正しいかと問うが、師はただ、忘れた、と応える。師は常に前に向き、弟子は後ろを振り返る。老いることは後を顧みぬ前進であり、弟子が忘却する師を引き留める必要はない。

矛盾——*どちらも選ばなければ*

「師曰く。私に従わなければおまえを打つ。私に従えばおまえを打つ。どちらも選ばなければおまえを打つ。」
師の問いを弟子は矛盾と受け取るだろう。しかし師が弟子に問うているのは師の用意したそれではなく、弟子の選択である。師に打たれることに甘んじるか、それとも与えられたものを越えるか。つまり弟子は、師に応えて自ら選択を創り出さねばならない。

迷宮——*迷う*

学芸は師の数々の身体によって構築されている。その身体は弟子にとって迷宮をなす。
師は徴である。学芸に勤しむことはそう難しいことではないが、勉学を通して師を見出すことのできる者はごく僅かである。徴は思いがけない細部、見落とされているどこかに現れる。
徴は身体の通路である。
芸は数多存在するが、師が見出される仕方はただ一通りしかない。

問答——*一緒に歩いているのだ*

「私は見知らぬ街にいきなり迷い込み、出くわす一つ一つの光景をただ記憶するか、スケッチするかして、自分がどこをどう歩いたのか、次は何が見えるのかと、ひたすら自分を見失わなずにいるだけで精一杯だった。案内をしてくれると期待していた先生自身も、わからないのだ、などと言い出す。いきなり突き放されたように感じて途方に暮れそうになるなか、それでも私はなんとなくこう感じた。そうか、どこかわからないが、私たちは一緒に歩いているのだ、と。」

愉悦——*もっと心地よい歓喜に満ち溢れるものを*

「もっと心地よい響きを歌い出そうではないか、もっと歓喜に満ち溢れるものを。」
師をもつこと、すなわち、師を認識し、師に従い、師を崇めることができる者は、その幸福の喜びに浴する。それは、幻を追い、諂い、無感動となることの対極にある。その喜びは、籤ではなく篩によってもたらされる。あるいは喜びそのものが篩となる。師という篩によっ

て、弟子は否を篩い落し、肯定する力を選り分ける。

様式——*モードに身を包まれて*

「弟子たちはこぞって述べ立てた。我こそが師の素顔を知っている、と。ある者は師の思い出を語り、別の者は師の手記を盗み出し、ある者は師の衣服をこっそり持ち出し、別の者は師を模写した絵を取り出した。ある者は書き取った師の教えを読み上げ、別の者は師について陰口を叩いた。そして、最後に誰かが師の仮面を被った。」

師は外見に無頓着だが、自身の様式は細部にいたるまで徹底されている。様式は外への現れであると同時に内部の捏造である。それはただ、見る者自身にその様式への隔たり具合を告げ知らせる。

欲望——*汝の欲望があたかも師の欲望であるかのように欲せよ*

師が何を欲するか、弟子は知らない。師の欲するところを欲するのは、弟子ではなく、むしろ師の奴隷である。

弟子が何を欲するか、師は知らない。師もまた弟子の奴隷ではない。弟子の欲望への師の無関心が弟子を導く。

師は弟子に、弟子は師に依存しない。どちらかが欲するものではない欲望が生じたとき、師と弟子は結ばれる。

労働——*日々の雑事に追われることは*

日々の細々としたことは、たとえそれが取るに足らないないものに見えたとしても、それらを相手にすることは弟子にとって喜びとなる。弟子は自らの労働が何のためなのかを理解しない。それらがすべて理解されるとき、師弟の関係は終了するだろう。

別れ——*そして私たちのもとを去っていった*

師は去る。それも唐突に、いつ去ったのかわからないあいだに。

「書き進めれば書き進めるほど、彼の過去は遠ざかり、同様に、見出すはずの師の姿も捉え損なう結果となった。途方に暮れた彼は、書き溜めたものをすべて破棄し、あらためて別の書き物を用意することにした。あるときは師を思いながら、あるときは師とともに出会われたものを思い出しながら。」

（ほんまなおき　コミュニケーションデザイン・センター・准教授）